未来を創る資質・能力育成事業　未来の創り手育成プログラム（令和8年度～令和10年度）

「問い」を起点とした授業改善と探究的な学びの深化

～「令和の日本型学校教育」の実現と、主体的・対話的で深い学びをもたらす授業のあり方～

背景・目的

現代社会の急速な変化に対応する「未来の創り手」の育成を目指し、研究推進員（国語・数学・地理歴史/公民）を中心に先進的授業モデルの構築と客観的データに基づく授業評価（検証システム）を推進。成果を県内公立高校へ広く還元する。

研究の柱

知見の獲得
- 推進員による先進校視察の実施（最先端の指導法取得）
- 視察成果の校内全体共有・全職員の共通理解形成

（実践・検証へ）

校内実践・検証
- 「問い」を起点とした授業計画（指導案）の作成・試行
- 見取り・パフォーマンス評価・評価問題の導入
- 生徒アンケート等データによる効果検証・改善

（発信・共有へ）

成果の発信
- 研究公開日の開催
- 3年間の実践プロセス・研究紀要の体系化と共有

3カ年ロードマップ（段階的に推進）

令和8年度（1年目）　インプット
- 推進体制整備、先進校視察の実施
- 「問い」起点の授業計画（初期モデル）作成と試行
- GPSテスト・職員アンケートによる現状把握

令和９年度（２年目）　実践の深化とデータ検証
- パフォーマンス評価等を組み込んだ授業実践
- 評価問題、アンケートによる多角的な分析
- 研究公開の実施、全教科への意識波及

令和10年度（３年目）　成果の体系化と県内波及
- 研究成果の体系化（研究報告の作成）
- 研究公開の実施
- 持続可能な授業改善システムの校内定着

期待される変容と成果

生徒の変容	教師の変容	県内への貢献
「問い」も持つ事で主体性が向上、探究的アプローチで自ら課題解決する力が身につく。	講義型から「伴走・ファシリテート型」へ転換。エビデンスに基づく授業の振り返りの定着。	本校が拠点（ハブ）となり、「令和の日本型学校教育」を推進する具体的モデルを県内へ提示。

「未来を描き、実現する場所。」鹿児島県立加世田高等学校

「問い」を起点とした授業改善と探究的な学びの深化



鹿児島県立加世田高等学校

2026年12月

CONTENTS

01 チームメンバー

02 研究の背景と目的

03 研究の柱（活動内容）

04 ３カ年のロードマップ

05 期待される成果

06 本年度の取組

07 今後の展望

問いを起点とした授業改善と探究的な学びの深化

01｜チームメンバー

Our Team

研究推進員3名を中心とした研究基盤の確立のためのメンバー。

研究基盤の確立に向け、研究推進員3名を中心としたメンバーによりスタート。

校長（研究推進委員長）
教頭（研究推進副委員長）
国語科　平山香里　研究推進員
地公科　小畑是也　研究推進員
数学科　徳富　寛　研究推進員
理　科　吉元博樹　視聴覚IT係
数学科　松元大介　教務主任

02｜研究の背景と目的

Background

現代社会の急速な変化を見据え、次代を担う「未来の創り手」を育成することは喫緊の課題。

県教育委員会より3年間の研究指定を受け研究を推進。

Purpose

① 推進員の配置と授業改善

令和８年度は研究推進員（国語・数学・地理歴史/公民）を中心に、先進的な授業モデルを構築する。

② 探究的な学びの深化

生徒自らが「問い」を立て、対話を通じて解決へ向かう力を段階的に引き出す。

③ 成果の波及

本校の実践研究で得られた成果を、公開授業等を通じて県内公立学校へ広く発信・共有する。

問いを起点とした授業改善と探究的な学びの深化

03｜研究の柱

本研究は、以下の3つのサイクルを連動させて推進する。

インプット

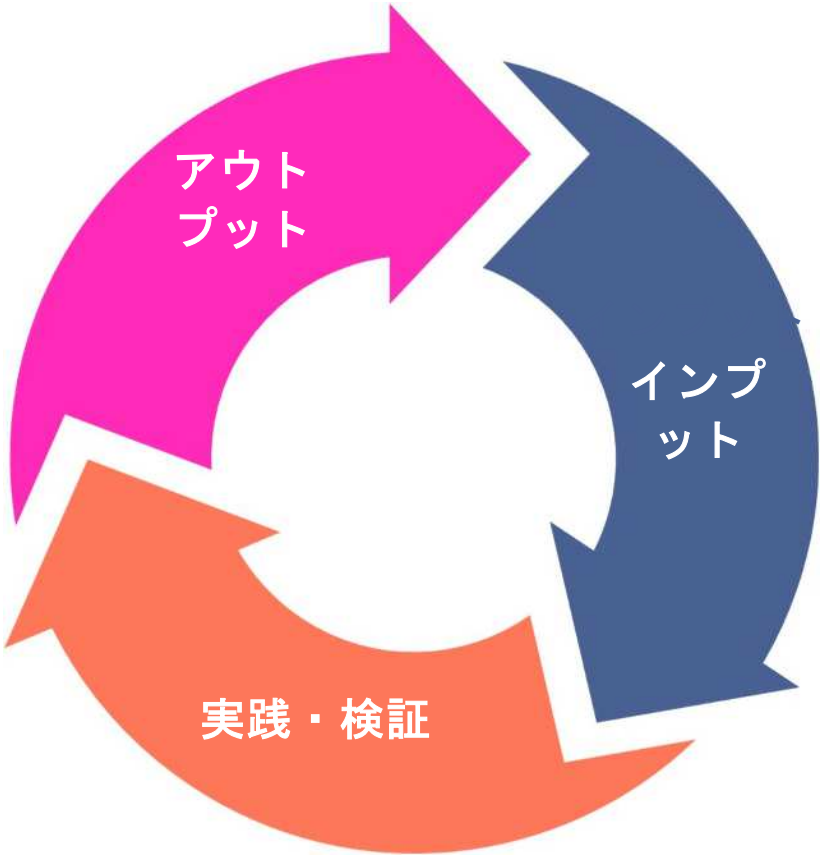
先進校視察・研究推進員による情報の校内共有
教職員意識調査の実施
授業改善のための職員研修

実践・検証

「問い」を起点とした授業実践
ＧＰＳテスト等による検証

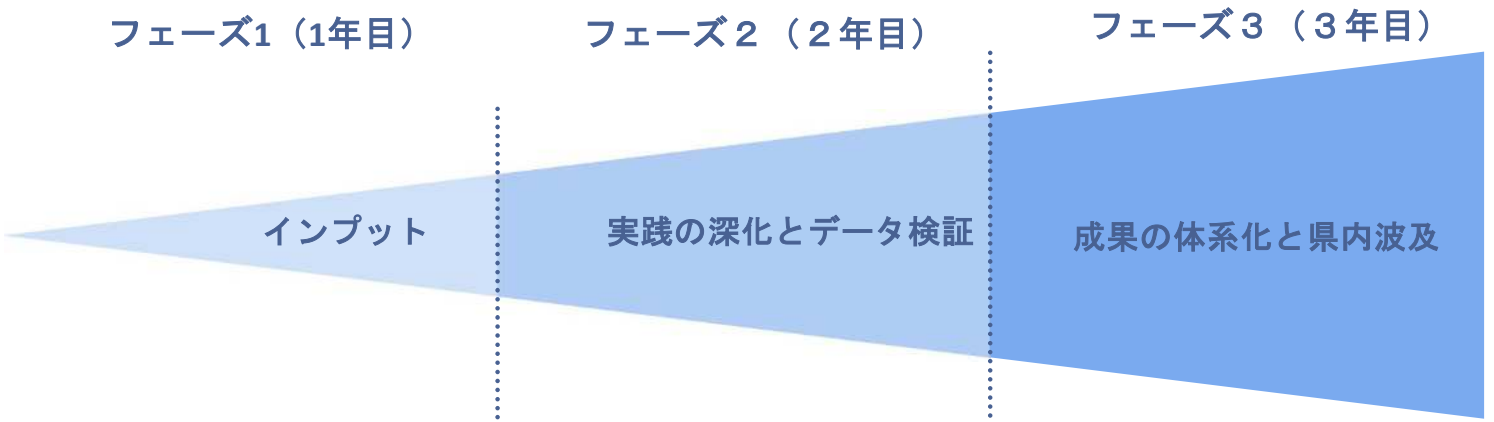
アウトプット

公開授業の実施・県内公立高校への成果波及



04｜3カ年のロードマップ

段階的に推進し研究の根を広げます。



- 推進体制整備、先進校視察の実施
- 授業改善のための職員研修
- 職員意識調査の実施
- ＧＰＳテスト等による現状把握

- パフォーマンス評価等を組み込んだ授業実践
- 評価問題、アンケートによる多角的な分析
- 全教科への意識波及

- 研究成果の体系化（研究紀要作成）
- 研究公開の実施
- 持続可能な授業改善システムの校内定着

05｜期待される効果

生徒の変容

「問い」を持つ事で主体性が向上、探究的アプローチで自ら課題解決する力が身につく。

教師の変容

講義型から「伴走・ファシリテート型」へ転換。
エビデンスに基づく授業の振り返り定着。

県内への貢献

本校が拠点（ハブ）となり、「令和の日本型学校教育」を推進する具体的なモデルを県内へ提示。

06｜令和8年度の取組

先進校等視察、職員意識調査、職員研修、GPSテストの実施

- 熊本県立宇土中学校・高等学校
  第80回九州算数・数学教育研究（北九州）大会
  神戸大学付属中等教育学校
  京都市立開建高等学校
- 職員意識調査（右図参照）
- 職員研修（佐藤浩章先生（東京大学大学総合教育研究センター））
- GPS-Academic中高版

意識調査の結果からにクリアしなければならない課題について

探究的な学びの強化が必要だと感じている。95%

探究的な学びが進路実現にプラスに働くと感じている。68%

授業改善を行うことに対する時間的･労力的な不安。 77%

自由記述

「基礎学力･進学実績の維持」と「探究的な学びの深化」を両立させるうえで、壁となっていることや工夫できる点があればご記入ください。」

･探究的な学びを進めることが、学力や進学実績と密接な関係にあるのは確実なのか、指導にあたり未だ不安がある。

･授業を工夫するための試行錯誤の時間的余裕がない。

･授業時間の不足が課題。進度をあげ、教科書を終わらせるのが精一杯。問いを立て探究的な学習をするほどの余裕はない。

･管理職のリーダーシップを含むチームワーク

令和８年度国語科における取組

１　「未来の創り手育成プログラム」における研究・活動の概要共有

（１）問いを起点とした授業改善の研究（探究的、主体的、対話的で深い学びの実現に向けた評価の在り方を踏まえた授業改善の研究）
（２）推進委員による先進校視察、各種研修の報告・情報共有

２　本校国語科における授業等の現状及び改善の方向性について協議

（１）地方の進学校としての高い進学実績と丁寧な進路指導を維持しつつ、探究的な学び（「問い」を起点とした授業改善）をどう融合させていくべきか。
（２）上記（１）の状況において、生徒が主体的に問いを立てるための単元設定や授業の構築・転換をどのように進めていくべきか。
（３）「個別最適な学び・協働的な学び」「探究」「国語の授業におけるICT活用」を融合し「確かな国語力の向上」につなげるにはどうあるべきか。

３　「問いを立てる」授業（研究授業）の実施・協議

（１）授業改善の方向性の再確認
（２）その他新しい授業モデルの構築について討議

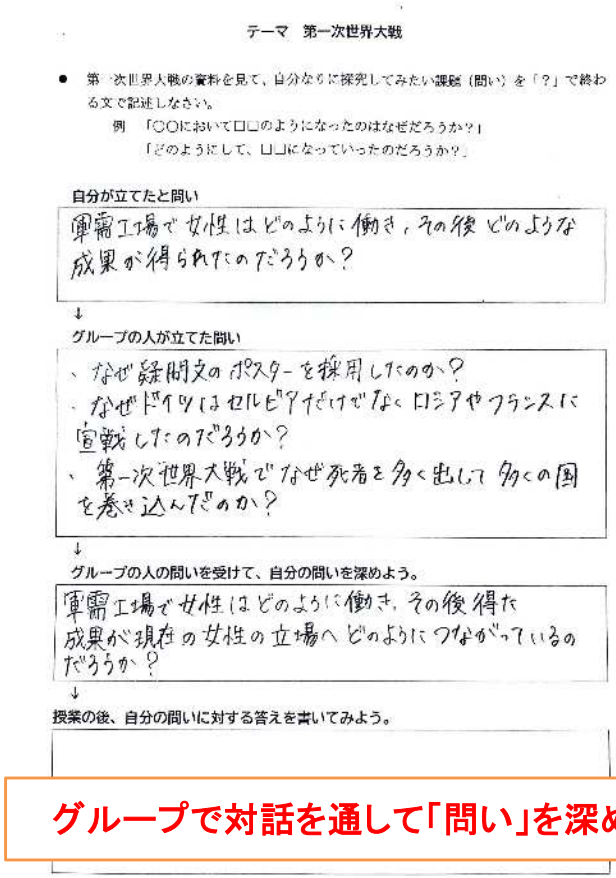
08｜令和8年度の取組　その２

令和８年度地歴公民科における取組

単元ごとの「問い」の立て方の研究



身近な資料を用いて「問い」を立てる



グループで対話を通して「問い」を深める

問いを起点とした授業改善と探究的な学びの深化

09｜令和8年度の取組　その３

令和８年度数学科における取組

基礎学力の定着に向けたICT活用と協働的な学びの推進

1. 課題
　数学科において生徒間の学力差が著しい状況にある。上位層を意識した授業進度の中では、下位層の生徒における基礎学力の未定着が課題となっている。

2. 改善策
　授業冒頭に5分間の「基礎問題テスト」を毎時間実施し、授業後半には「リフレクションプリント」を取り入れた理解度の確認を行った。
　プリントの解答が難しい生徒に対しては、「周囲との教え合い（協働学習）」や「タブレット端末のAI機能の活用」を促し、自力および仲間との協働によって最後まで課題を書ききる指導を徹底した。

3. 成果と変容
　これらの取組により、単元テスト等の結果において下位層の生徒であっても基礎的な問題に対する定着度が向上していることが確認できた。

10｜今後の展望

個から全体へ
全校波及・実践
（研究推進委員会の設置）

知見の自校化
実践モデルの構築
（加世田高校モデルの構築）

検証と体系化
（変容に着目した効果検証）

２年目の目指す姿

⇒「一部の試行」から「学校全体の日常」へ。

⇒　得られた知見を本校生徒の実態に合わせてカスタマイズ。

⇒　全教科・全職員で取り組む授業改善へと深化

小さな工夫から、大きな可能性へ。

日々の実践を大切に。
一人ひとりの工夫を、学校全体の力に。



鹿児島県立加世田高等学校

TEL : 0993-53-2049
MAIL :kaseda@edu.pref.kagoshima.jp
WEB : http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/kaseda/
〒897-0003
南さつま市加世田川畑3200番地